

夫が死んだのは月曜日だった。

水交換の月曜日。毎週月曜日は、二人の部屋で飼っている海月の水槽の水交換をする。一緒に暮らし始めたときに夫が連れて来た海月は数ヶ月で死んでしまったが、その後夫は、その海月とそっくりな、赤い縞模様の海月をどこからか入手して再び飼育を始めた。

九月のある月曜日の朝、私はいつも通りの時間に出勤する夫を、私は不機嫌な顔で見送った。ダイニングテーブルに残された夫のマグカップには一口分のコーヒーが残っており、私はそれを飲み干して食器を片付け始めた。重ねた皿を持ったまま、ふと窓の外を見下ろすと、見慣れた背中がゆっくりと駅へ向かって遠ざかっていくのが見えたので、私はその背中に向かって「一口だけ残すの、やめてよ」と呟いた。

それが、生きていた彼と過ごした最後の朝だった。

彼は小さな出版社の編集者で、私が初めて書いた小説の編集を担当した。

彼の勤める出版社が主催する、三十歳以下の作家志望者にデビューのチャンスを与えるという趣旨の短編小説コンテストに、二十代最後の秋を迎える私は応募した。

その後出版社から電話があり、私の作品は入賞こそ逃したものの、光るものがあるので出版したいとの話を受けた。

出版社の小さな応接室で、中年の男性社員は私を「先生」と呼び、脂ぎった笑顔を保ちつつ力説した。

「自費出版とは違います。本は出版して終わりではなく、その本を書店に陳列し、販売促進活動も行い、読者に届ける。それらを全部含めての出版です。先生にはその費用の一部を負担していただきますが、弊社は責任を持って出版に携わります。先生にご負担いただく費用のお支払いは、分割払いもございます」

私は出版契約書にサインをし、後に夫となる担当編集者を紹介された。

彼は静かな笑顔を浮かべて「コダマと申します。よろしくお願い致します」と名刺を差し出し、私が名刺に書かれた『樹神』という彼の名字を見て数回まばたきを繰り返しているのを見て「樹木の神と書いてコダマと読みます。珍しい苗字ですよ」と申し訳なさそうに言った。

樹神は私と同じ年で、口調は常に柔らかく、素朴で控えめな笑顔には私への敬意が感じられた。

私が描いた作品の主人公は「あい」という名の十歳の少女で、母親から毎晩、同じ動画を繰り返し見せられている。その動画はフォアグラ用のアヒルを飼育する様子を

記録したもので、アヒルは自分の体がやっと入るくらいの狭い檻に閉じ込められ、こじ開けられた口に突っ込まれた鉄パイプを通して、強制的に餌を胃に流し込まれる。

あいが、夏の終わりに、祖母に連れられて海水浴に行く――。私が描いたのは、それだけの物語だ。

樹神は三度目の打ち合わせの終わりに「ところで、お酒は飲まれますか？」と私に聞いた。私は「はい。強いですよ、私」と言って笑ってみせ、彼は「一度お手合わせをお願いします」といつもの笑顔を浮かべた。

その週末、樹神と出版社から二駅離れたバーで飲み、私より先に酔った彼は「先生の作品の中で、僕が好きなのは、海から上がった主人公が祖母に『今ここにはいないけれど、確かにいたの。信じてくれる？』って聞くシーンなんですよ。その台詞も、『確かにいたの』が、海月ってのが、好きで、好きで」

と、首を振った。私は「先生って呼ぶの、やめていただけませんか」と笑い、続けて「なぜ好きなんですか？」と訊ねた。彼はそれに答えず、ためらいがちに私の手に触れた。

あいは、祖母に連れられて、生まれて初めて海水浴場を訪れた。

海水浴場は閑散としていて、遠く沖の方に二人、人影が見えるだけだった。緑色と灰色を混ぜたような海と、干からびたごみが散らばった砂浜がどこまでも続いているのを見て、あいは初めて聞く波の音と、壁のない開放的な空間に興奮した。荒廃した小さな建物の裏で水着に着替えると、走って海の中に入っていった。

水温に身体が慣れると、彼女は足がぎりぎり底につくところまで進み、波に揺られながら顔を水面につけてみたり、掌で波を撫でてみたりした。しょっぱい唇で沖を指すわけでもなく、砂浜でビニルシートに座っている麦わら帽子の祖母に、ときどき手を振りながら、逃げ場もなく太陽に照らされていた。

太陽が傾きかけた頃、指先に、透き通ったゼリーが漂ってきた。水泳帽と同じくらいの大きさと、タピオカのようにも見えたが、ココナッツミルクに沈むことは難しそうだ。祖母に見せてあげようと思って掴んでも、するりと指先から零れてしまい、海の中に落としそうになっては何度も掴み掬い直した。

零れ落ちないように、彼女はそれを自分の水着の胸の中に入れた。水着の中で、それが彼女の体温にも海水の温度にも馴染みつつ、自由に変形しているということを感じ

じながら、泳いで砂浜に向かう途中で、それはいつのまにかするりと消えてしまった。

海から上がったあいは、祖母に「今ここにはいないけれど、確かにいたの。信じてくれる？」と言ってから、自分が泣いていることに気付いた。

祖母はあいの身体をバスタオルで包み、ビニルシートに並んで座ってあいの背中を撫で、いつもの笑顔でゆっくり頷きながら、あいの話を聞いた。

「それはくらげの死骸よ。死骸で良かったわ。くらげは毒を持っていて、生きているくらげに刺されたら大変なのよ」という祖母の言葉に、あいは『無害な死骸』という言葉が浮かんだ。

「私も死骸になったらムガイになれる？」あいは祖母に訊いた。

「ムガイってどういう意味？」祖母は私に訊ねた。

「有害じゃないってこと。私は有害物質だって、ママがよく言うから」

あいがそう言うと、祖母はただ黙ってあいの背中を撫で続けた。

次の日、あいは学校の図書室で『海の生き物図鑑』を手に取り、『くらげ』のページを探した。

海の月と書いてくらげ。自分で自由に遊泳することが出来ず漂っているだけのプランクトンで、脳も心臓もないが拍動はある。眼は十六個あり、明るさはわかるが物体を認識できない。

あいはそれから、ふとした瞬間にくらげのことを思い描くようになる。海の色に馴染んだ不定形の幻影の中で、周期的な収縮と弛緩が繰り返されている。無秩序な波に身を任せて絶え間なく揺らぎながら、水面下で屈折した太陽光の量を知る。

樹神と入籍し、一緒に暮らし始めたマンションの一室に、彼は海月を連れて来た。

彼は私に、手間のかかる飼育や短い寿命について説明し、最後に「この海月は、強い毒を持っている。刺されたら命にかかわるような、強い毒だよ」と言った。私はどう反応していいのか分からずに黙って彼の目を見つめ、少しの沈黙の後、彼は「海月は死ぬと水に溶けてしまうんだ。だから、水着の中に仕舞った海月は、すり抜けたのではなくて、溶けてしまったんじゃないかな」と言った。

毎日の餌やりは彼の、毎週月曜日の、水槽の水交換は私の仕事と決めた。

樹神は真面目で思いやりがあり、食器を新しくしたら気付いてくれるような、理想的な夫だったが、彼が、一年目の入籍記念日に、仕事帰りに小さなブーケとスパークリグワインを買ってきてくれた夜、彼はとても酔っていた。

「飲んできたの？」と聞くと「付き合いで、ごめん。記念日なのに」と謝った。私は「会社のお付き合いがあるのに、途中で切り上げてくれたのでしょうか？ それに、プレゼントを買って帰ってきてくれて、嬉しい。ありがとう」と言った。

彼は大きなストレスを抱えているようだった。いつか彼の会社の人間が私に「自費出版とは違います」と強調していたけれど、実際は、書き手に費用を負担させて、売れはしない多量の出版とプロモーション活動をし、「やってみたがだめだった」と報告して収益を得るのが現実だった。

酔った彼が「才能もない奴が、自分の本が世に出るっていうだけでぬか喜びして、作家気取りで俺に命令する」と愚痴をこぼすとき、かつて私を「先生」と呼び「作家気取り」をさせて経費を請求するシステムの中に、客として自分が存在していたことを再確認した。

彼の飲酒量は増え続け、日曜日は朝から酒を飲んでいて。

ある春の月曜日、彼の二日酔いが酷く、私が彼の会社に欠勤連絡をした。私は、彼が仕事に穴をあけるほど飲んでしまったことを反省し、酒を控えるようになるきっかけとなることを期待したが、彼は二日酔いを緩和するための「迎え酒」と言って、酒を飲み続けた。

そしてその日から、彼の飲酒はさらに深刻化した。私が警察から連絡を受け、泥酔して路上で寝ていたという彼を引き取りに行き、帰宅すると、彼は玄関で放尿する。仕事でも隠れて飲んでいるようで、近い未来に解雇されることが簡単に想像できた。

海月が水に溶けて消えて、夫が別の海月を購入して飼い始める繰り返しにも、月曜日の水交換にも、泥酔した夫が問題を起こすことにも慣れた私は、自分と夫が死に、その死骸が残らずに水に溶ける情景を思い描くようになっていた。

二年目の入籍記念日の夜は、泥酔してソファで眠っている夫の呼吸が止まっていなことを確認しながら、海月の水槽を眺めて過ごした。

彼の飲み残したウィスキーのグラスを片手に、少し涙を零した後「このままじゃ死んじゃうよ」と呟いてみた。「お酒は有害物質だよ」と独り言を呟きながら、海月の毒とは、どのくらいの強さを持っているのだろうかと考えた。

「一緒に死のうか」私の小さな声は、酒で麻痺した彼の感覚器には届かないのだろう。返事はなかった。

九月のある月曜日の朝、夫はいつも通り二日酔いだったが、いつもに増して不安定だった。話すスピードが極端に遅く、ときどき呂律が回っていなかったので「深酒もいい加減にしてよ。今日は会社に行けるの？」と呆れながら言った。彼は「大丈夫。いつもごめんね」と言い、朝食をぼろぼろこぼしながら食べ終わると、ゆっくり支度をして家を出た。

午後、水槽の水替えを終えて一休みしているところに、夫の会社から連絡が入り、職場で倒れて病院に搬送されたことを知った。私は、彼が職場で飲酒して寝てしまったのだろうと思い「いつかこうなると思っていました。どうお詫びしていいのか…」と電話口の彼の上司に謝ろうとしたが、電話口の男性はそれを遮り「とにかく急いで病院へ行ってください」と、切迫した口調で言った。

私の夫は、脳梗塞で倒れ、そのまま目を覚ますこともなく、逝ってしまった。

私が、朝の彼の様子を見て異変に気づき、すぐに病院に連れて行けば間に合ったのかどうかを、死亡宣告をした医師に尋ねることはしなかった。その代わりに「いつかこうなると思っていた」という私の言葉を振り返り、それがどんな意味を持っていたのかを反芻した。

彼の亡骸は、水に溶けて消えることも、暮らしている環境の溶媒に溶けることもなく、火葬されて白い壺に納まった。

私は白い壺を、水槽の中がよく見える位置に置き、彼の部屋の整理を始めた。パソコンのロックを解除するパスワードはいくつか思い付くものを試したが、どれも外れていた。

彼が亡くなってから半年経った今日、水槽の海月が水に溶けてしまったことに気づき、新しい海月を購入するかどうかで迷っていると、ふと彼のパソコンのパスワードの候補が浮かんだ。

「jellyfish」数字を含まないパスワードは危険だと私に繰り返した夫は、なぜか数字を含まないパスワードで、自分の死後、妻にファイルを開かせた。

彼が最後に保存した文書は、私の作品の別のエンディングだった。

主人公のあいは、水着からすり抜けた海月を探しに海に戻り、海の中で『こだま』という生物と出会う。『こだま』は十六個の眼を持ち、だらしがなく、気が弱い生物だったが、あいは『こだま』と仲良くなり、やがて深い絆で結ばれる。しかし『こだ

ま』のちょっとした失敗により、海が汚れ、海の中の仲間たちが生命の危機に晒される。

『こだま』の正体は、かつてあいの水着の中にいた海月で「僕は無害な死骸になるから、ここにいさせて」と言って、あいの水着の中に戻りたいと訴える。

「僕がここにいれば、君もおばあさんに『確かに、ここにいる』って言えるよ。君の胸に舞い戻るのは、無害な僕。僕は君を傷付けない」文書はそこまでで、保存した日時は、夫が亡くなった日の夜明けの頃だった。

彼はこの文書を打った後、重たい身体と頭痛を引きずりながら部屋を出て、キッチンにいる私に「おはよう」と言う。――その情景が水槽の中で揺れた。